

サツマイモ・ジャガイモを栽培してみよう

一般財団法人いも類振興会 理事長

かりや あきお
狩谷 昭男

子供の頃のおもしろい体験は、大人になっても長く記憶に残るものだ。サツマイモ・ジャガイモのファンを広め、いもの消費拡大に繋げるためにも、幼少期にいもの植付けやいも掘りなどの栽培を体験することは重要なことだと言えよう。

今日では、全国各地にいも掘り体験のできるところが数多くみられるようになった。本誌のNo.129で井上浩さんが「サツマイモの町、川越の戦後」の中で、いも掘り観光農園の嚆矢は、昭和28年に始まった川越市今福中台の篤農家である坂本長治さんだったことを紹介されている。そして、東京オリンピックが開催された昭和39年の秋には、当時、幼稚園児であった皇太子の浩宮さまが東京都下の農業試験場でいも掘りをされ、それをマスコミが大々的に報じたことによって、いも掘り観光が大ブームとなっていったという歴史がある。

時は移り、秋篠宮家の^{ひさひと}悠仁さまは、平成28年9月で10歳になられた。文藝春秋2016年10月号によれば、「悠仁さまは、今年5月には、サツマイモ植えをした。この行事は、上級生として低学年の世話をしながらの活動だった。農園の人からサツマイモの苗植えの説明を聞いた後、3年生に教えながら、一緒に苗植えをし、楽しく過ごした

ようだ。」との記事があり、サツマイモの苗を植えるという貴重な体験をされたことがうかがえる。

いも類振興会でも、補助金を受けていた平成10年代には、主に小学生向けの「サツマイモを育てよう」、「ジャガイモを育てよう」という標題で、サツマイモとジャガイモの栽培・管理をわかりやすく解説した二つの小冊子（B5判・約10頁）を作成し、全国の児童たちに無償配布し、いも類の啓発活動を進めた時代もあった。残念ながら今は補助金もなく財政事情が厳しくなっているので、そうした啓発・広報活動の実施も難しくなっている。

現在、全国には膨大な田畑の不作付地がみられ、もったいない状況にある。これらの不作付地を、例えば、子供たちに体験農園・学校農園として広く活用されていくことが、これまで以上に求められていると言える。その農園では他の作物よりも作り易く、収穫後の試食も楽しめるサツマイモ・ジャガイモ栽培が最適だ。こうした生活に身近ないもの栽培体験を通じて、生き物、自然環境などに対する教育効果が期待できることはもちろん、ゆくゆくは食べ物の消費にも関心が高まり広まっていくことを期待したい。